

二〇一三年 山口県大会上演作品

作品名「ハローモモ」

作者名 渚太陽

連絡先 宇部鴻城高等学校

作品紹介

野良犬と出会った子供たちは、犬の声がかかるようになり  
空き地でその犬を飼うことにしたが…

男 4～6人 女 5人

キャスト

文也

直之

正春

美代子

モモ

母

祖父

孫

男 1

男 2

河村のババア

オーブニング

一人たたずむ老人 写真を見ている

孫が近寄ってくる

孫 おじいちゃん。こんなところにいたんだ。

祖父 ああ、ちいちゃん。

孫 おじいちゃん、それ何？

祖父 ああ、これかい？これはね…見るかい？

孫 ちいちゃん、見たい。見せて見せて！

祖父 大切に見るんだよ。

孫 うん。わあ、かわいい。これおじいちゃんの犬？

祖父 まあね。

孫 名前は？

祖父 真ん中がモモ。そしてブチ、クロ、シロ、リン…

孫 リン？犬の名前じゃないみたい。

祖父 そうだね（笑）

孫 いいなあ。ちいちゃんも犬飼いたいなあ。

祖父 ちいちゃん、犬飼いたいの？

孫 うん。ねえ、どこで撮ったのこの写真？

祖父 ここだよ。

孫 ここ？

祖父 そう、ここがまだゴミだらけの空き地でね…

い

音楽

子供たちのシルエットがうかぶ

缶蹴りをして遊んでいる子供たち

手紙を読む直之

#出会

直之

お母さんへ、お母さん元気ですか？僕は、まあ元気です。この前、水泳大会で一等になったよ。学年の新記録だつてさ。見せたかったなお母さんに。お兄ちゃんとは、まあ仲良くやってます。そうそう、お母さんからもお父さんに頼んでよ。お父さんに犬が2飼いたいってお願いしたらさ、絶対に駄目だつて言うんだ。僕ね、毎日散歩に連れてって世話をするつて頼んだんだけど駄目だつて。本当n分からず屋なんだから。お母さんも大変だろうけどお仕事頑張つてね。また、手紙を書きます。さようなら。

文也 直之みつけ！（空き缶を踏む）へへへ。

直之 ああ見つかっちゃった。

正春 なんだ、直君、もうみつかっちゃたの。

直之 正春こそ、もう見つかつてるじゃん。

正春 ああ、呼び捨てにするなよ。一応俺は、直君の先輩

なんだからな。

直之　なんだよ先輩って。おっぱいの親戚か？

正春　やはは、直君なんだよ急におっぱいって。やらしいなあ。アハアハ……おっぱいだって、恥ずかしいじゃないか。先輩だよ先輩。

直之　変なの顔赤くしちやって。じゃあ、アップルパイの親戚か？

正春　そうそう、旨そうだね……こうセンをパイではさんで先輩ってちがーう！そうじゃなくて年上ってこと。年上の人にはちゃんと「さん」とか付けて呼ぶもんなんだよ。

直之　へーでも変だね。正春は一人しかいないのに「さん」って付けたら、3人いるみたいに聞こえないか？

正春　えーそう？

直之　だってさ、正春、正春にー！正春さん！

正春　ああ、本当だ。3人いるみたい聞こえる。

直之　だろう？だから正春は正春でいいの。

正春　そうか。なんか違うような気がするけど……

美代子を探している文也

文也　くそう、どこに行ったんだ美代の奴。

正春　みっちゃん頑張れー

直之　兄ちゃんに負けるな！

空き缶に近づこうとする美代子

文也　美代子！

美代子　しまった！

美代子、文也スローモーションで空き缶に近づく

美代子、缶を蹴ろうとする

文也、缶を踏もうとする

正春　説明しよう！

直之　缶蹴りとは、隠れているものを鬼が見つけ鬼が缶を踏みながら「みっけ！」という遊び！

正春　見つけたものは、鬼より早く缶を蹴飛ばしてしまえば、すでに捕まった仲間とともに実社会に飛ばたくことが出来るのである。

直之　何だか大げさだなあ。で、この角度で蹴りますのですいません（客席に向かって）ここらあたりに缶が飛ぶと思いますのでお気を付け下さい。

正春　気を付けてください！

直之　　フアアー  
正春　　フアアー

美代子が缶を蹴ろうとした瞬間、文也がそれ阻止しようと空き缶に向かう

美代子　もらった！  
文也　　させるか！

文也、あらかじめ缶に付けていたひもを引っ張って空き缶を手繰り寄せる

蹴りそこなう美代子

美代子　（空振りして転ぶ）痛っーい……ずるいよ、文君。  
ひもなんかつけちゃってさ。

文也　　ハハハ。  
直之　　兄ちゃんずるいよ。

文也　　頭脳プレーって言ってほしいなあ。  
正春　　また、文也君が勝っちゃったよ。

文也　　じゃあ、今度は直之が鬼な。  
直之　　ええ、いやだよ。  
文也　　どうして。

直之　　だって、兄ちゃんが蹴った空き缶を拾いに行くの大変なんだもん。

正春　　文也君、蹴る力強いからなあ。

美代子　私もうやーめた。

文也　　ええ、もう？わがまだまだなあ。

直之　　僕も疲れたよ。

正春　　僕ももうお腹すいちゃった。

文也　　お前は、いつもお腹すいてるだろう。

美代子　別の遊びにしようよ。

文也　　じゃあさ、何して遊ぶ？

直之　　何しようか？

美代子　何する？何する？何する？

正春　　ねえねえ何食う？

文也　　オレが聞いているんだよ。それと何食う関係ないし。

正春　　あ、そうか……じゃあ、かくれんぼ！

直之　　馬鹿だなあ、正春。かくれんぼを進化した形が缶蹴りなのに戻してどうすんだよ。

正春　　そうだね……だったら、家でファミコンする？

文也　　うーん、ファミコンか……

美代子　ねえ、宝探しない？

文也　　宝探し？

正春　　宝探し？

美代子 そう、みんながお互いに宝になるものを隠し合って、

ヒントを頼りに宝を探すの。

文也 おお！面白そうだな。

美代子 でしょ？

直之 面白そう！

正春 面白そう！

文也 じゃあ、早速やろう。……で何隠すんだ？

美代子 みんな宝物になるもの持つてる？

文也 宝物ね……あつそうだ。(ランドセルを探る)

直之 ？

文也 じゃーん！どうだ、きれいだろうこのビーダマ。

正春 おお！

直之 ええ！兄ちゃんそれどうしたの？いいなあ。

文也 いいだろう。

美代子 私は、この鈴にする。

直之 じゃあ、僕は、この鉛筆！

文也 正春は持つてんのかよ、宝物。

正春 へへ……じゃーん！

文也 うおー！そ、それは！

正春 頭が高い、ひかえおろう！この「たまごっち」が目

に入らぬか！

美代子 たまごっちだあ！

直之 いいなあ、いいなあ。

文也 すげー、お前どうしたの？それ。

正春 へーん。お母さんに買ってもらったんだ、昨日。

文也 いいなあ見せてみるよ。

正春 汚い手で触らないでよ。

直之 見せて見せて。

文也 いいだろう、ちよつとだけだからさ。

正春 ちよつとだけだよ。

美代子 すごーい。もう「まめっち」に育ってるじゃん。

文也 がんばったなあ。

直之 まめっちだ。

正春 育てるの結構難しんだよ。トイレの世話とか。

文也 なるほど……よし、じゃあ早速隠しっこしよう。

美代子 そうね。じゃあ、直君のを私が隠して、私のを直君

が隠してね。

直之 わかった。

文也 じゃあ、俺と正春が交換で隠し合うんだな。

正春 うん。

文也 よーし、隠すぞ。

全員 おー！

正春 簡単なところに隠してね。なくなったら大変だから。

文也 ばーか、簡単なところだったらつままないだろ。

直之 つまんないだろう。

正春 そうか。じゃあ、僕も難しいところに隠すぞ。

それぞれ宝物を交換して隠す

舞台上の空き缶にたまごっちを隠す文也

穴を掘って土の中にビー玉を隠す正春

木の枝に鈴を引っかける直之

花壇の鉢に鉛筆を隠す美代子

隠し終わって集合

文也 よーし、集合！

みんな わーい。

美代子 じゃあヒントを言い合おうよ。私はお花の近くのと

ころに隠したよ。

文也 俺はそうだなあ……暗い所に隠した。

直之 僕は、高い所！

正春 僕も暗い所に隠した。でも僕のは難しいよ。

文也 じゃあ、探そう！

全員 おー！

辺りを探す子どもたち

最初に美代子が鈴を見つけて登場

花壇から鉛筆を見つける直之

美代子 直君。鈴を枝に引っ掛けたって、音がしたからすぐ

にわかつちやったよ。

直之 みっちゃんも花壇に挿すなんて、鉛筆が泥だらけに

なったじゃん、もう。

文也 あ、もう見つかったのか？いいなあ。俺、全然分か

らないよ。

どこからか声がする

「助けて、もう私……」

直之 何か言った？

美代子 ううん。何も

直之 兄ちゃん、何か聞こえなかった？

文也 ああ……何か聞こえたような……

どこからか声がする

「助けて、助けて……」

そこに、白い犬（犬役の女の子）が登場  
疲れ切った様子

直之 兄ちゃんあれ！

文也 あっ、犬だ！

犬、倒れる

美代子 あっ！倒れた。

文也 大変だ。正春！正春！

正春、登場

正春 文也君、全然見つからないよ、一体どこに隠したんだよ……

直之 そんなことより、正春あれ見て

正春 どうしたの？見つかった？わー、犬だ！

美代子 どの犬だろう？

文也 さあな。それよりこの犬疲れ切ってるみたいだな。

直之 本当だね。死んじゃうのかな？

正春 どうしよう……

美代子 水でも飲ませてみたら。

文也 そうだな、よし正春！水を汲んで来てくれ。

正春 わかった！

文也 大丈夫かしつかりしろよ。

犬を看病する文也と美代子

水を入れるものを探す正春

直之、空き缶を見つけ、それを正春に渡す

正春、水を入れて戻ってくる

正春 文也君、持ってきたよ。

文也 よーし、貸して！

犬に水を飲ます文也

文也 ゆっくり飲めよ……

美代子 大丈夫？

水を急いで飲み干す犬

空き缶を落とすと中からたまごつちが出てくる

正春 あーっ！僕のたまごつち！何だよ、水浸しじゃないか！どうしてくれるんだよ！

直之 知らないよ、僕が水を入れたんじゃないから。

正春 電源入いんないよー（泣き）僕のマメつちが、死ん

じやったよ。



美代子 どうしたの？

正春 どうして、空き缶の中にたまごつちがあ…

直之 どうやら、兄ちゃんが空き缶に隠してたみたい。

美代子 なるほど…

文也 それより、正春お前、何か食べ物持ってないか？

正春 知らない！

文也 なんだよそれ。飴玉か何か持ってないか？

正春 いやだ、持ってもあげない。

文也 何怒ってるんだよ。いいじゃないか、マメつちの一匹や二匹が死んだって。こつちは、今にも犬が死にそうなんだぞ。

正春 だって、空き缶に隠したんなら教えてくれたっていいだろう。

文也 そんなこと言ったって、こつちだって慌てるんだからさ…

文也 あっ、そうだ！

文也、ランドセルの中からパンを取り出す

文也 ほら、給食の残りだけど…

犬（犬役の女の子）、パンをがつついて食べる

喉をつまらせる

文也 正春、ほら水！水持って来て！

正春 嫌だよ！

文也 ほら、喉つまらせてるだろう。

正春 嫌だよ

直之 正春、行ってきてよ。

美代子 ほら、苦しんでるよ。

正春 もう仕方ないな。

水を汲んで来て飲ませる正春

落ち着いた様子の犬

子供たちに感謝の意を表す

文也 ほら、正春にありがとうって言うてるぞ。

正春 そんなことしたって、文也君のこと許さないからな。

文也 もう、自分がたまごつちに水をかけたんじゃないか。

正春 だって、もとはとえば、文也君があんなところに

隠したからさあ…

文也 でもさ、お前が水を汲んできたから、こうして犬も

元気になったわけだし…

モモ そうそう。

直之 正春のおかげだよ。

モモ 本当本当。

美代子 元気になってよかったねえ。(モモにむかって)

モモ うん、正君のおかげで元気が出たわ。

文也 見る、こいつだってこうやって、感謝してるんだ。

ここはこいつに免じてだな。

モモ たまごつちのことは許してあげてよ正君。

美代子 水につかったから水に流すってことで。

モモ みっちゃん、うまい！

全員 ハハハ

正春 わかったよ。そんなにまで君が言うなら……

全員 えーっ！

子供たち、犬から離れる

正春 あ、お、お、……

直之 い、犬が……

全員 しゃべったー！？

モモ ありがとう、本当に助かったわ。

正春 ふ、文也君！

直之 兄ちゃん……

美代子 え？ええ？

文也 しゃ、しゃべってるぞ、犬が……

モモ このところ食べ物がなくてフラフラだったのよ。

君たちのおかげね。

文也 なあ、お、お前、しゃべれるのか？

モモ うん。っていうか犬はみんなしゃべれるよ。

直之 みんな、しゃべれる？

美代子 本当に？

モモ しゃべってるんだけど、みんなには聞こえてないというか……まあ、耳を澄まして私たちの声を聞く

うとしたら、聞こえるんだけどね。

文也 へえ、そうなんだ……

正春 へえ、そうなんだって納得しちゃうの文也君！

美代子 こんなことってあるんだ……

直之 わーいわーい、犬がしゃべった。

文也 まあ、いいじゃん。聞こえるものは聞こえるんだから。それに、犬と会話できるなんてちよつと楽しい

じゃん。

直之 そうだよ。たのしいたのしい。

正春 まあ、ね。

美代子 不思議だなあ。

モモ とにかく、本当にありがとう。

文也 どういたしまして。

モモ ところで、みんなで何してたの？

文也 ああ、宝探し。

モモ 宝探し？

正春 あーっ！思い出した！もう、文也君のせいで僕のためごつちダメになったじゃないか。

文也 ごめんって。その話はもうさつき謝ったろ。

直之 水を入れたのは、正春だろう。

正春 文也君が変なところに隠すからいけないんだよ。

文也 悪かったって……

美代子 許してあげなよ、正君。

モモ なるほど、文君が正君の宝を隠したんだね。

直之 そうだよ、それで、ヒントを頼りに探し合うんだ。

モモ じゃあ、文君の宝はどこに隠したの？

美代子 それが……

正春 教えない！

文也 正春！

正春 だって、僕だってヒント一つで見つけたんだから、文也君も「暗い所」っていうヒント一つで、見つけてよ。

直之 見つけたって言ったって、正春の場合は、偶然じゃないか。

文也 そんなあ、頼むよ、あれ、結構お気に入りなんだよ。

美代子 正君、意地悪しちやだめよ。

正春 嫌だ。

モモ 文君、私が探してあげようか？

文也 どうやって？

モモ ちよつと、こつちに来て。

文也 何だ？

モモ、文也のニオイを嗅ぐ

モモ えーと……

モモ、ニオイを嗅ぎながらビー玉を探す

直之 何してるの？

文也 ニオイで分かるのか？

正春 ニオイ？

美代子 ビー玉だよ？ニオイなんかついてるのかな？

モモ うーん、文君のニオイが薄いなあ……

文也 ああ、正春が隠したからな。

モモ そうなんだ。

モモ、正春のニオイを嗅ぐ

正春 はははは、やめろよ。くすぐったいじゃないか。  
モモ よくしわかった。

モモ、一目散にビー玉の隠し場所に行く

モモ あった！文君、見つかったよ。

直之 すごいなあ。本当にニオイで見つけられるんだな。

文也 ありがとう。

正春 ねえねえ、僕のニオイってどんなニオイ？

モモ うーんとねえ、大根が腐ったニオイかな。

正春 へーって、なんだよその大根が腐ったニオイって！

一同、鼻をつまんで離れる

モモ ふふふ、たくあんよ。

正春 ああたくあんね……

直之 たくあん、たくあん。

モモ はははは。正君、たくあん好きなんだ。

正春 うん、あの黄色くて甘いのが大好きなんだ。おやつ

に一本食べる時もあるよ。

文也 一本！？

美代子 たくあんの一本食いって……

モモ はははは。

直之 ねえ、名前なんて言うの？

モモ 名前？

直之 そう名前。

モモ 名前なんてないよ。

文也 野良犬だもんね。名前ないか。

モモ ……

直之 そうだ！ねえ、名前つけようよ。

美代子 いいわね。

正春 名前かあ……

文也 そうだなあ……よし！名前つけよう。

モモ 本当、名前つけてくれるの？

文也 うん。何にする？

正春 何にしようかなあ。

直之 白い犬だから、シロってのはどうかな。

美代子 単純すぎるわよ……ミケってどう？

文也 どう考えても猫の名前だろ、それ。

正春 そういえば、オスなのか、メスなのかもわかんない

しね。

文也 そういえば確認してなかったな。直之、お前確認し

るよ。

直之 エーどうやって？

文也 そんなのタマがあるか、ないかに決まってるだろ。

美代子 タマってなあに？

正春 みっちゃん、女の子がタマっていわないの、恥ずかしいじゃないか。

美代子 じゃあ、タマって名前にする？

正春 みっちゃん、タマって（恥ずかしがる正春）

直之 で、どうやって？

文也 股の間を見るんだよ。

正春 ぼ、僕がやる。（ちよつと、興奮して）

直之 なんて？

正春 だって、こうやって（スカートをめくる真似）見る  
んでしょ。ぐふふ。

文也 おい、お前何考えてんだ？

直之 兄ちゃん、正春が怖い顔してるぞ。

文也 ああ、こいつにだけは確認させられない人として。

直之 うん。

その間に美代子がモモから耳打ちされてメスと判明

美代子 メスだって。

正春 みっちゃん（悲）

直之 女の子か。かわいいなあ。

文也 メスね…：そうだなあ、モモってのはどうだろう？

美代子 モモ？

直之 モモ！

正春 太もも！

美代子 こら！

正春、美代子と直之に突っ込まれる

モモ モモかあ…：…

文也 鼻先がピンクだからモモ。いいだろう。

直之 うん、かわいい名前だね。

モモ ♡

美代子 ♡

正春 モモねえ…

文也 よーし、今日からお前はモモだ。

モモ うん！私の名前はモモ！よろしくね。

全員 よろしく。

文也 じゃあさ、正春お前、モモを家で飼えよ。

正春 えー、飼いたいけど無理だよ。多分…：団地だから。

文也 そうか…：美代子は？

美代子 えっ？私…：うちは絶対にダメって言われる。お父

さん「動物はダメだ」って言うもん。

直之 兄ちゃん、うちで飼おうよ！

文也 きっと、父さんが反対すると思うぞ。「うちは食品を扱ってるから動物は飼えない」って前にインコ飼おうとした時も反対しただろ。

直之 そうかあ…

美代子 でもさ、文也君の家には、お庭もあるし、頼んでみてよー。

文也 ああ、そうだなあ、よし父さんに頼んでみるか。

直之 やったー！

正春 僕も頼んでみる。

美代子 そうしよう。どっちにしても今日は、モモは連れて帰らない方がいいよね。

文也 いきなり連れて帰ったら、反対されるかもしれないしな。

正春を呼ぶ声

正春 あっ、お母さんだ。僕、帰らなくちゃ。

文也 よし。でも、とにかく頼んでみよう。だから、モモ

明日もここにいろよ。

美代子 あんまりウロウロしないでここにいてね。

モモ うん？分かった。私、ここにいろよ。

美代子 じゃあ、明日も学校帰りにここに来ようね。

文也 よし、明日な。

正春 じゃあね。みんな。

直之 バイバイ。

モモ バイバイ。

文也 じゃあな。また明日。

暗転

遊んでいる子供たち

#母との思い出

一列に並んでいる子供たち

どうやら、「よっちゃんいか」を持ってきたのは誰だ

遊びをしている

美代子 先生は悲しいわ。どうして学校に「よっちゃんいか」

を持ってくるの？

文也 僕は、持ってきてません。

美代子 お黙り。「よっちゃんいか」のにおいが教室に充満

してるのよ。きっと、誰かが、持ってきたのに違

ないわ。

直之 正春じゃないの、食いしん坊だから

正春 違うよ。

美代子 いいのよ、そうやっていつまでもしていきなさい。今日

日は、においのプロ、モモ先生をお呼びしています。

全員 えっ？

美代子 さあ、モモ先生お願いします。

モモ は、では。

全員のおいを嗅ぐモモ

モモ わかりました。犯人は、美代子先生です。

全員 えーっ！先生みずから！

美代子 さすがね、モモ先生。よく、見破ったわね

モモ もう、学校には「よっちゃんいか」を持ってこない

てください！

全員 ハハハハ

美代子 すごいねー！モモよくわかるね。

文也 本当、百発百中だなあ。

直之 すごい、すごい。

正春 まあ、「よっちゃんいか」なら僕でもわかるかな。

直之 正春は、食いしん坊だからな。

文也 モモがいたら、教室の花瓶を割った犯人はすぐにわ

かるな。

美代子 目をつぶって手を上げる時間がいらぬ。

モモ 楽しかったね、ああ騒ぎすぎたら喉が乾いちやった。

水を飲みに行くモモ

文也 そうだ、今日はモモに食べ物を持ってきたんだ。

美代子 私、給食で残ったパンと牛乳を持ってきたよ。

直之 僕も持ってきた！

正春 僕も！

文也 ジャーン！今日は、豪華だぞ。これだ！

フライドチキンを出す文也

近寄って来るモモ

正春 おお、フライドチキンだ。

直之 どうしたの兄ちゃん、これ。

モモ いいにおい。

文也 そうだろう、ウマそうだろう。父さんに直之と食べるからって頼んで買ってきてもらったんだ。

モモ へえ、いいなあ。私にくれるの？

文也 もちろんだよ。そのために持ってきたんじゃないか。

直之 良かったなあ、モモ。

正春 僕も食べたいなあ。

直之 正春、よだれよだれ。汚いなあ。

文也 はいどうぞ。

モモ ありがとう。では、いただきます。

美代子 はい、ストロップ！（フライドチキンを取り上げる）

モモは食べちゃダメ。

文也 何だよ、いじわるするなよ。美代子！

直之 そうだよ。

正春 いくら自分が食べたいからって！

美代子 正君じゃないもん。

文也 だったらさあ。

美代子 わかってないなー、みんな。モモも犬のくせにダメじゃない。

モモ 何？

文也 何言ってるんだよ、美代子。

美代子 犬にはね、食べちゃダメなものがあるんだ。

直之 食べちゃダメなもの？

正春 ？

文也 何だよ、食べちゃダメなものって。

美代子 この、骨付きチキンは、骨ごと食べて、喉や内臓に骨が刺さる危険があるから食べちゃダメなんだ。

直之 本当？

文也 そうなのか？

モモ 知らなかったわ……

正春 じゃあ、これは（タマネギを差し出す）

モモ あっ、それは私ダメなんだ。

正春 ばあちゃんところでとれた新鮮な奴だぞ。

美代子 タマネギなどのネギ類は、犬の赤血球を破壊し、貧血で内臓疾患を引き起こすことがあるんだ。まあ、これは犬を飼う人の常識だけど。

正春 そうなんだ。

文也 知らなかった。

モモ ごめんね。

直之 じゃあさ、チョコレートは？

モモ 私、チョコレート大好き！

直之 だよね！

正春 おお！チョコレート！

美代子 ブルー！チョコレートも成分の一つテオブロミン

が、下痢や嘔吐の症状を引き起こし、食べすぎると死亡する場合もあんだよ。

モモ はあ……そう。

直之 モモ……、ゴメン。

落ち込む文也、直之、正春



モモ あつ、でも気持ちだけでうれしいわ。それに、私は

みつちゃんが持ってきたパンと牛乳があるし、チキンとチョコは文君たちが食べたらいじやない。

文也 そうだね。

正春 たまねぎは！

直之 たまねぎは、正春が食べよ。

美代子 あ、でもチキンは、骨から外して肉だけをあげれば

問題ないし、チョコレートも少しだけなら、問題ないと思うよ。

文也 本当か？美代子。

美代子 うん。大丈夫だよ。チョコだけにチョコツとね

モモ やったー！

直之 良かったな、モモ。

文也 よーしモモ、俺がほぐしてやるよ。おいしいからな。

いっぱい食べろよ。

モモ うん、ありがとう。

美代子 私のパンも食べてね。

モモ ありがとう、みつちゃん。

直之 正春、よく生で玉ねぎ食べるなあ。

正春 おいしいよ、直君も食べる？

直之 ええ？

みんなで食べる

モモ おいしいね。

文也 だろう？……ところで、美代子は何でそう犬について

て詳しんだ？

美代子 ああ：：えーとね、お父さんに聞いたの。お父さん

犬のことに詳しくて……

文也 へえ。

直之 じゃあ、どうして犬飼えないのかな？

正春 本当、そうだよね。

美代子 ……。

文也 正春。モモのこと家の人に相談したか？

正春 相談したんだけど、やっぱりうちの団地は、ペット

禁止だから駄目だつて。

文也 そうか……、うちも父さんが絶対に駄目だつて言う

しな……ごめんな、モモ。

直之 ごめんな、モモ。

美代子 ……。

モモ ううん、大丈夫。私、今まではいろんなところさま

よつてたけど今は、文君や直君がこうして世話してくれるし……今は、このゴミ捨て場が私の家だよ。

文也 そうだ、ここにさ、モモの家をつくろうぜ。

直之 家？

文也 犬小屋代わりの寝床を作るんだよ。ほら、ベンチや

毛布もあるし。

美代子 犬小屋ね……。

正春 おもしろそうだね。

直之 兄ちゃん、ナイスアイデア！早速作ろうよ。

モモ いいよ、別に寝床なんかなくても。

文也 でも、ちよつとでも寝やすい方がいいだろう。なあ。

美代子 そうねえ……

直之 そうだよ。

文也 よし、作ろう。

直之 おう！

正春 おう！

文也 モモも手伝えよ。自分の寝どこなんだからさ。

モモ はい。みっちゃんも、一緒にね。

美代子 う、うん。

ゴミを片づけて犬小屋の代わりを準備する。

楽しく部屋を作る子どもたち

毛布やクッションを持って来て部屋を作る。

思い切り笑って 思い切り泣いた日もある

時には誰より 本気で怒ってくれた

楽しい時にも 寂しい時にも

いつもそばに居て 手を握ってくれた

キラキラと輝いた 思い出の中には

あなたと私 すごしてきた一緒に

たとえば振り向けばあなたがいて

こぼれそうな笑顔で立ってる

たとえば振り向けば友だちがいた

そんな場所だった

全員 完成！やったー！

入れ替わりに椅子に座ってじゃれ合う子どもたち

そこに、迎えに来る正春の母

正春 あっ、母さんだ。うん今いくよ。ごめんね文也君。

今から塾なんだ。

文也 あそう、いいよ別に。

直之 えっ？正春、塾に行ってるの？ゲゲー

正春 なんだよ、ゲゲーって。

モモ じゃあね、正君。

正春 バイバイ。

美代子 あ、私も早く帰らないと叱られちゃう。待って、一緒に帰る。文君、直君、モモまた明日。

モモ バイバイ。

直之 バイバイ、また明日。

文也 ……

モモ ……？ どうかしたの文君？

文也 別に……、正春の奴いつも盛り上がってるときに母さんが迎えに来て帰っちゃうんだよ。

モモ 仕方ないよ。正君にも事情があるし。

文也 あいつは、まだまだ、親離れが出来てないんだよ、きつと。いつも母さんに甘えてさ……

モモ まだまだ、親離れする歳じゃないでしょう。それに、親離れする日は誰にでも来るわ。

文也 そうかな？

直之 (チョコを食べながら) あつ、今日はガキレンジャーの再放送がある日だった。兄ちゃん、僕、先に帰るね。

文也 ああ、車に気をつけろよ。

直之 じゃあね、モモ。バイバイ。

モモ バイバイ、直君。

文也 ……

モモ かわいいね、直君。

文也 かわいくなんかいいよ、うるさいだけ。

モモ いいなあ、兄弟か……

文也 モモには兄弟いないの？

モモ いたような気もするけど、生まれてすぐに山に捨てられたからよくわかんない。

文也 ……そうなんだ。

モモ それから、野良犬人生が始まったのよ。

文也 野良犬人生。何だかっこいいね。

モモ そうかな？

文也 だって、一人でたくましく生きてきたって感じがする。

モモ いろんな嫌な事があつたけどね。

文也 今は？今はつらくない？

モモ そうね、まあ今は文君たちとこうしていられて楽しいかな。

文也 そう、よかった。

直之、モモがおしゃべりしているところに忘れたチョコを取りに戻る

モモ 文君の家は誰も迎えに来ないの？

文也 父さんは仕事で遅いから……仕方ないんだ。

モモ そう……じゃあ、お母さんはどうしてるの？

文也 母さんは、……直之を生んですぐに死んじゃった。

モモ ごめんなさい……私知らなくて……

文也 ああ、いいんだよ。でも直之は知らないから内緒に……

話を聞いていた、直之

直之 兄ちゃん？

文也 な、直之……

モモ あっ……

直之 死んだって、何？ねえ……

文也 いや、あの……

直之 お母さんは、遠くに行ってるって言ったじゃないか！

文也 そ、それは……

直之 うそつき！兄ちゃんのうそつき！わーん

文也 ま、待てよ直之！

直之 兄ちゃんの馬鹿あ！

文也 直之！

走り去る直之

モモ 直君待つて！……うっ（苦しい様子で倒れる）

文也 モモ、どうしたの？

モモ 大丈夫、ちよつとめまいがただけ。それより、早く直君を追いかけて。

文也 う、うん。

モモ 私もあとから行くから。

文也 わかった！

追いかける文也

反対から泣きながら直之の登場

直之 う、うう。うわーん。ひつく。

文也 直之……。何だ戻ってたのか。

直之 兄ちゃんのうそつきー（泣きながら）

文也 ……ごめん

直之 遠くに行ってるって言ったじゃないか。それなのにそれなのに……

文也 だから、ごめんって言ってるだろう。

直之 兄ちゃんの馬鹿あ。

文也 泣くなよ、直之。もう帰ろう。

直之 お母さんに会いたいよー。

文也 泣くなつて。

直之 うわーん。

文也 俺だって、お母さん、遠くに行つてゐるって思つてた

んだ…でも、死んでるって…俺だって会いたいよ。

俺だつてお母さんに会いたいよ！ぐすん。

直之 …兄ちゃん泣いてるの？

モモ、心配になつてやつてくる

二人の様子を隠れて見ている

文也 泣いてなんかかないよ。

直之 泣いてるよ。

文也 馬鹿野郎。お前と一緒にするな。

直之 一緒にだよ。

文也 一緒にじゃないよ。

直之 一緒にだよ、だつて兄弟じゃないか。

文也 直之…

直之 兄ちゃん…お母さん本当に死んじゃつたの…

文也 うん…

直之 そう…死んじゃつたんだね…

文也 うん…

直之 お兄ちゃん、お母さんのこと覚えてる？

文也 おれも小さかつたからなあ…

直之 そうか…

文也 一度だけさ、一度だけ母さんが保育園に迎えに来た

ことがあるんだつてさ。

保育園に？

直之 うん。あとから先生に聞いた話なんだけど、いつも

だつたらバスで連れて帰つてもらえるはずなんだ

けど、その日は母さんが迎えに来るつて連絡があつ

たんだつて。それで、俺はずーつと保育園で待つて

たんだ。先生達がだんだん少なくなつてきて、最後

に園長先生が「迎えに来ないねー、文君。先生が、20

送つて帰つてあげようか？」つて言うから俺は、「お

母さんが迎えに来るつて言ったんだから待つ！」つ

て言つたらしい。そしたらさ、やつと母さんが来た

んだ。

よかつたね。

直之 母さん、仕事が遅くなつて迎えに行くのを忘れてた

らしい。俺がおしめを背中に背負つて、街灯の下に

待つてゐる姿とちよこちよこと駆け寄つて母さんに

抱きついた時の姿を見て母さん泣いたんだつて。

直之 兄ちゃんにもかわいい時があつたんだね。

文也

母さんさ「ごめんね、ごめんね」って泣いてたんだ  
つて。泣かなくなつていいのに。俺、本当にうれし  
かったんだ。母さんが迎えに来てくれて。

直之

……いいよね、誰かが迎えに来てくれるのつて。  
うん。

文也

正春とかが、時々うらやましいもん。

直之

そうだよな……

文也

でも、僕には兄ちゃんがいるからいいや。

直之

何だよそれ。

文也

こんな弟だけど、よろしく頼むぞ兄ちゃん。

直之

よし、頼まれた。

文也

フフフ

文也

フフフ……

文也

よし、帰るか。

直之

うん……ねえ、兄ちゃん。

文也

何だ？

直之

僕、やっぱりお母さんは遠くに行つてるんだと思う。

文也

どうして、そう思うんだ？

直之

だってね、今日もお母さんに手紙書いたんだ。

文也

ああ、あれか。いつもお父さんが困つてたよ。どこ  
の郵便局に出そうかって……

直之

そうなんだ。でもね、その手紙に犬が飼いたいわつて

文也

お母さんをお願いしたんだ。

直之

うん。

文也

そうしたらさ、モモに会えたじゃん。

直之

そうだな。

文也

お母さんに願いが届いたから、お母さんは僕たちの  
ことをずっと見てるんだよ。

直之

きつと、そうだな……

文也

優しい瞳で二人を見つめるモモ  
そこに浮かび上がる二人の母

優しい瞳で二人を見つめるモモ

そこに浮かび上がる二人の母

母

文也ー、直之ー。

文也

えっ？

直之

誰？

文也

お母さんだ。

直之

本当？

文也

お母さん。

直之

あ、あの一

母

直之ね。大きくなつたわね。手紙ありがとね。お母  
さん、いつも楽しみにしてるのよ。

直之

本当に。お兄ちゃん、お母さん読んでるつて。

文也

すごい、本当にお母さんだ。

母 文也、いつもありがとうね。直之の面倒を見てくれ

て。直之もお兄ちゃんの言うことをちゃんと聞くのよ。お母さんね、二人のことずっと見てるからね。

直之 お母さん、ありがとう。

母 何？

直之 お母さんが、モモを連れてきたんでしょ。

母 フフフそうね、モモももうすぐお母さんになるから、ちゃんとお世話してあげてね。

文也 ええ？モモがお母さん。

直之 本当に？

母 ええ。

文也 すごいなあ、モモがお母さんか。

母 ほら、モモのそばに行っておあげ。

母、モモのいる方向に二人を促す

モモのそばに駆け寄る二人

直之 あっ、モモだ。モモー

文也 モモ！お母さんになるのか？

モモ うん。

母 そろそろ私も行かないと。

文也 また会えるかな。

母 また会えるわ、きつと。

直之 モモ！お母さん。モモ！お母さん。

母 じゃあね、直之。

直之 バイバイ、お母さん。

文也 バイバイ。

母 バイバイ……

文也 仏壇開けて待つてるよ！

母、消える

直之 お兄ちゃん、僕、こんなにいいことがあってもいい

のかな。

文也 どうして？

直之 お母さんに会えるし、モモがお母さんになるなんて。

フフフ

モモ うれしそうだな。

文也 うれしいよ、兄ちゃんはうれしくないの？

直之 うれしいさ。

文也 だよね。…ねえ、モモ何から手伝ったらいい？

モモ そうね、いろいろ忙しくなるわよ。

文也 正春や美代子にも知らせようぜ。

直之 うん。

暗転

#モモ母になる

相談している子供たち

美代子 じゃあ、出来るだけ、この場所に人を近付けないよ

うにしないとね。

直之 どうして？

美代子 誰かに見つかったら、大変なことになるじゃないよ

わかった。

正春 どうしてさ？

美代子 とにかく、野良犬は見つかったら大変なの。

文也 よ、よし。とにかくここに人が近づかないように見

張ってあげればいいんだな。

モモ お願いね。

文也 よし、モモが安心して子供が産めるように、放課後

はここを見張ろうぜ。

全員 おー！

ヘルメットをかぶって見張りをしている子どもたち

文也 総員配置につけ！

直之 了解しました！

文也 (小声で) そっちは異常ないかー！

美代子 (小声で) 異常ありません。

文也 (小声で) 誰も近づかないように警戒しろ！

直之 (小声で) はい。

正春 (小声で) わかりました。

みんなであたりを警戒している

美代子 (小声で) 大変でーす。

文也 (小声で) どうしたー？

美代子 (小声で) 前方より敵襲来！

直之 (小声で) 敵襲来！

正春 (小声で) 警戒警報発令！

文也 あれは、近所の噂はすべて知らないと気が済まない、

河村のババア。

美代子 どうしましょう、隊長。

文也 ここは、何としても犬がいることをばらされない様

にしないと……

直之 どうしよう……

文也 何とかしなくちゃ。

正春 そうだ！



文也 何？

美代子 どうした？

正春 思いつきりアホになろう。

文也 アホ？

直之 何言ってるんだよ正春。

正春 いいからほら、僕の言うとおりにして。

文也 わかった。

変な踊りをする子どもたち  
犬を抱えた河村

河村 あんたたち何やってるの？

全員 ほげー、あちゃぱー

河村 相変わらず、バカばかりやってるのね。気持ち悪いわね。ほーらララちゃん、アホがうつるから、見ちゃダメよ。

ララ キャンキャン

通り過ぎる河村

正春 はあ、やっと思つた。

直之 すげー変な目で見られたよ。

文也 アホがうつるってなんだよ。

美代子 私お嫁にいけないかも…

正春 でもおかげで、モモの事はばれなかったね。

文也 ああ。

モモ ううう。

全員 モモ！

モモに近寄る子どもたち

文也 大丈夫か？

正春 頑張れ、モモ。

直之 モモ苦しそう…

美代子 大丈夫。モモは戦ってるのよ。

モモ はあ、はあ…

直之 モモ、死んじゃわない？

文也 死ぬわけじゃないか。

美代子 子供を産むってのは大変なのよ。

直之 大丈夫、モモ…

モモ 大丈夫よ、直君。

正春 モモ！

文也思い立って応援する

みんなもそれに続く

文也 フレーフレーモーモ！

正春 フレーフレーモーモ！

全員 頑張れ頑張れモーモ！

文也 負けるなモモ！

応援するみんな

優しい気持ちに包まれた時間が過ぎる

美代子 ……文也君、見て見て！

文也 わあ、生まれた。生まれた。

直之 かわいいなあ。

美代子 ちっちゃーい。

正春 すごいねえ。赤ちゃんだ。

文也 よく頑張ったね、モモ。

モモ ありがとう。みんなのおかげよ。

直之 へえ、そうやってなめてあげるんだね。

モモ まだ、目も見えないからね。こうやって、なめてきれいにしてあげるのよ。

美代子 この子は、尻尾がクリンってしてるわ。かわいい。

正春 モモ、ちゃんとお母さんしてるんだね。

モモ 当たり前でしょ。フッフ

美代子 ねえ、この子たちにも名前を付けない？

文也 いいねえ。

直之 つけようつけよう。

正春 何にする。

文也 えーとそうだなあ…。こっちはブチかな。

直之 こっちは、シロ！

正春 じゃあ、こっちは、クロだね。

直之 この子は…

美代子 はいはいはい、リンがいいリンが！

文也 リン？

直之 犬の名前じゃないみたい。

正春 たしかに。

美代子 いいの。尻尾がクリンってしてるからリン。かわいいでしょ。ね、モモ。

モモ かわいいわね。

美代子 でしょう。あつ、そうだ。これつけてあげる。

リンに鈴を付ける

美代子 首輪はないけどこうやって腕につけたら…ほらか

わいい。

文也 猫じゃないんだし。

美代子 いいじゃん、ねえ。リンリンリン。

モモ みんな、素敵な名前を付けてもらったわね。よかつたね。

直之 シロ、シロ。

正春 ねえ、写真撮ろうよ。

文也 どうしたんだよ。そのカメラ。

正春 家から持ってきたんだ。みんなで撮ろうと思って。

直之 ナイス正春。

美代子 撮りましょう！

正春 ほら、並んで並んで。撮るよー、はいチーズ。

美代子 あっ、次は変わってあげる。

正春 ありがとう。

美代子 一足す一は？

全員 にー！（ピース）ははは。

美代子 あっ、私、もう少し毛布か何か持ってくるね。

文也 そうだな……

モモ ありがとう、みっちゃん。

美代子去る

正春を呼ぶ声

正春 あっ、母さんだ。えーっ今から？母さん一人でいけばいいだろう。

文也 どうしたんだよ。

正春 母さんが、今から一緒に買い物に行こうって言うてるんだよ。

文也 夕飯の買い物か？

正春 ううん。今日、父さんの誕生日なんだ。だから誕生日プレゼントを買いに……

文也 そうか、だったら早く行ってあげなよ。

正春 えっ、でも……

文也 いいから、行けよ。誕生日なんだろう？

直之 行けよ、正春。

正春 わかったよ……。じゃあね、バイバイ。

文也 バイバイ。

直之 バイバイ。

正春 ……あつ、待ってよ母さん。ねえねえ、何買いに行く？やっぱりさ……

母に甘えるような雰囲気去る、正春

文也 何だよ、行きたくないって言うてたくせに……

モモ ……

直之 いいなあ、お前たち、モモ母さんだぞ。よし、僕も。

文也 で、でも……

直之、モモにすり寄る

文也の手を取り、膝枕に寝かせる

モモ ははは、直君くすぐったいよ。

直之 なあ、兄ちゃん気持ちいいだろう。

直之 いいでしょ、モモ。

文也 う、うん。

モモ もう、フフフ。

モモ フフフ

直之 シロ、もうちよつと向こうに行つてよ。

直之 モモ……あのさ、…

文也 何やつてんだよ、直之。

モモ なあに？

モモ 文君。

直之 母さんつてよんでいい？

文也 何？

文也 馬鹿だなあ、直之は。

モモ 文君もおいでよ。

直之 うるさいなあ、いいだろう、別に。

文也 えっ？

モモ いいわよ。

モモ 子どもなんだから、甘えたい時は、甘えたっていいのよ……

直之 母さん。

文也 何言ってるんだよ……

モモ 直之……

モモ いいのよ、さあおいで。

文也 本当に直之は子供なんだから。母さん……

直之 兄ちゃんもこうしてもらいなよ。気持ちいいぞ。

星空の下いつまでも母さんと呼ぶ声が続く

モモ ほらほら、お前たちもそこを開けてあげて。

暗転

文也 いいよ。

モモ いいから、さあ。

懐中電灯を持った男たちが暗闇の中を走る

犬の鳴き声が響く

男1 そっちにいないか？

男2 たしか、こっちで鳴き声が出たんだ。

男1 しっ！何か聞こえる。

探せ！野良犬だ！見つけろ！捕まえろ！

鈴の音が聞こえる

男1 そっちだ！

男2 いたぞ！

男1 よし、今いく！

男2 逃げたぞー、そっちに回れ！

男1 逃がすなー！

男2 うわー、こいつ噛みやがった！

男1 捕獲しろ捕獲だ！

男2 噛んだ！狂犬だ！

殴打される音

犬の鳴き声

次の日の夕方

雨 時々雷の音

文也、直之傘をさして登場

犬小屋が荒らされている

直之 モモーっ！ただいまー！

文也 いやー今日は、先生に怒られちゃってさ、居残り掃

除で遅くなっちゃったよ。ゴメンゴメン。

直之 兄ちゃん、これ…犬小屋が…

文也 えっ？どうして…誰がこんなこと。

直之 兄ちゃん、モモがいないよ。

文也 その辺にいないか？

直之 子どもたちもいない…

文也 ええ？

あわてて、探す文也と直之

あわてた様子の正春、美代子登場

正春 大変だー！

美代子 大変よ！

文也 どうしたんだよ？

美代子 あのね、今日ね、私たちが帰りが早かったから

モモにパンを持って行こうって。

正春 そしたら、いなくてき……

文也 そうなんだよ、どこに行っただろう？

美代子 それでね、いろいろ探してたら、市役所の方から鳴

き声が聞こえて……

文也 そこにいたのか？

正春 檻に入れられてた……

直之 どうして？

美代子 それ……

直之 ねえ、どうしてモモが檻に入れられてるの？

正春 保健所に連れて行かれるって……

文也 保健所？

美代子 弱ってる野良犬は、すぐに殺されるって……

文也 えっ？殺される？

直之 えっ、何で？

美代子 普通でも、3日後にはガス室に送られて、処分され

るんだって……

文也 処分……って、じゃあ、モモは？モモはどうなるん

だよ！

正春 年間に八十万頭も殺されるんだって……薬だっ

たり、時には殴って殺すことも……

文也 おい、何言ってるんだよ。

直之 ねえ、ブチは？シロは？クロは？リンは？

美代子 だから、動物を飼うときは責任を持って……動物

物実験にも使われるんだって……

直之 ねえ、どうなってるの？

美代子 もう……きつと……

文也 そんな……

直之 ねえ、兄ちゃんどういうこと、ねえったら……

文也 ……どうして、そんなこと知ってるんだよ！

美代子 ……

正春 そ、それは……

文也 おい！正春！

正春 みっちゃんのお父さんに聞いたんだ……

文也 えっ？何……

直之 どういうこと……？

美代子 私のお父さん、昔、市役所の駆除係だったの……

文也 駆除ってどういうことだよ……

美代子 私のお父さん、野良犬を殺してたの！

文也 そ、そんな……

美代子 ごめんなさい……

正春 ち、ちがうよ、みっちゃんが、謝ることじゃないよ。

お父さんだって、お仕事でしたことじゃないか！

美代子 でも、でも……

直之 兄ちゃん、モモがモモが……

文也 ……と、とにかく、行ってみよう。

駆け出す、文也

追いかける、子どもたち

#悲しみの別れ

市役所

檻の中で荒れ狂う、鬼気迫るモモ

モモ ガルルル……返せ！子どもを返せ！

子どもたち登場

正春 こつちだよ！

直之 居たよ！兄ちゃん。モモだ！

文也 モモ！

市役所職員に詰め寄る文也

文也 お願いです！モモを、あの犬を出してやって下さい。

お願いします。僕の犬なんです。……飼ってるわけ

じゃないけど僕の犬なんです。お願いします！

直之 そんな……まさか、モモが人を咬むなんて……

文也 嘘だ！……お願いです！出してやって下さい！

正春 無理だよ、文也君。……人を咬んだ犬は……

文也 モモの子どもは？シロは？ブチは？クロはどこに

いるの？……知らない方がいいって……殺し

たんだな……どうして？どうして、そんなことす

るんだよ！

美代子 うう……

モモ 返せ！私の子どもを！

文也 そんなことするから、モモが咬んだんだ！モモは、

子どもを守ろうとして……あつ、お願いします。行

かないで……ちょっと待ってよ！何でだよ！何で、

殺しちゃうんだよ！

直之 シロ……ブチ……クロ……リン

モモ 返せ！どこにやった！

文也 何でだよ！

檻に近づく文也と直之

文也 モモ……僕だよ……

モモ この人間が……っ！返せ！私の子どもを！

直之 モモ、モモ！

文也 わからないの？モモ。

直之 ねえ、兄ちゃん？モモは、何て言ってるの？僕、モ

モモの言葉が分からなくなっちゃったよ！

モモ お前たち人間が、私の子どもを殺しやがって！

文也 モモ……何言ってるのか、分からないよ。僕にも

モモの言葉が分からないよ……

モモ ガルルウ！（お前たちも、私が噛み殺してやる！）

直之 兄ちゃん、兄ちゃん！

文也 ……きつと、怒ってるんだよね。

モモ ガルルル……

文也 ごめんね……モモ……

モモ 返せ！

文也 僕たち人間の勝手な考えで、君たち動物を殺すなん

て……本当ごめん……

モモ ガルルル……

文也 そんな、そんな悲しい目をして……ごめんね……僕た

ちが、あんなところにモモの部屋を作ったから……

文也 僕が、ちゃんと責任を持って、モモと一緒に居てあ

げたら……こんなことには……僕が悪かった

文也 僕たちに怒ってるから、モモの言葉が分から

なくなっただ……

正春 文也君、仕方なかったんだよ。仕方なかったんだ！

直之 兄ちゃん……

文也 だって……そうだ、僕たちだって、モモにそこ

にいて欲しいから……勝手に思いでさ……

正春 それは、そうだけど……でも……

美代子 ごめんなさい、私……私……

直之 みっちゃん

モモ ウウウ……

文也 ……苦しかっただろうな……

モモ ウウ……

直之 せつかく……、せつかく、お母さんになったばっ

かりだって言うのに……うわー（泣き）

正春 ぐすん（涙）

モモ ……

美代子 リン……私……私……

文也 ふえーん、うわーん（泣）モモ……返事をしてよ……

モモ ……

文也 返事をしてよ！モモ！……グスン

表情がおだやかに変わるモモ

モモ ……そんなに泣かないでくれ。

文也 モモ？……モモの言葉が分かるよ。



直之 兄ちゃん、分かるよ。

正春 うん、分かる！

美代子 モモー……

モモ お前が、そんなに泣いたら、お母さんまで悲しくなるだろう。

文也 モモ！僕だよ、文也だよ。

モモ ごめんね、私がついていながら、お前の兄弟を死なせるようなことをして……本当にごめん。

文也 えっ？

直之 モモ！

モモ 何だ、お前もいたのかよかった……お母さん心配したんだよ。

文也 どういうこと？

直之 兄ちゃん……モモはきつと、僕たちを自分の子どもと勘違いしてるんだよ。

正春 モモ！

美代子 モモ！

モモ あ、よかったあ……みんな無事だったのね……お母さん心配したよ。

文也 モモ……

モモ ごめんね……お母さんのせいだよ……ごめんね……

文也 モモ！

直之 ……お母さん！

モモ 直之！

文也 きつと、僕が助けてあげるよ、だから……

直之 兄ちゃん、お母さんが、お母さんが！

文也 お母さん、お母さん！

モモ 文也——っ！

暗転

#思い出のあとに

写真を見ている祖父と孫

孫 ……おじいちゃん、それで、モモは死んじゃったの？ 32

祖父 うん……

孫 かわいそうだね……

祖父 いいかい？ちいちゃん。犬も猫も捨てられたら、悲

しみに目を潤ますんだよ。殺されるまで必死に抵抗

して、泣き叫ぶんだ。だから、責任を持って動物を

飼わないといけないよ。

孫 うん。

祖父 それでも、犬が飼いたいかい？

孫 うん。ちいちゃん大切に大切に飼うよ。

祖父 そうかい、そうかい。

孫　　じゃあ、おじいちゃんからも、お母さんに頼んでね。

祖父　　はいはい、わかったよ。

孫　　じゃあ、帰ろう。

祖父　　ああ…

孫　　そうだ、今日ね、直じいも来るって。

祖父　　そりゃあ、ひさしぶりだなあ…

立ち去るところに白い女登場

気付かずに通り過ぎる祖父と孫。

通り過ぎる際に鈴を落とす女

祖父が振り返る

顔を上げる女

見つめ合う二人

音楽

幕

